

A decorative border in a reddish-brown color, featuring a repeating pattern of stylized leaves and vines, framing the central text area.

河 出 文 庫

小 説 の 方 法

伊 藤 整 著

河 出 書 房

小説の方法

昭和二十九年四月三十日 初版發行
昭和二十九年六月十五日 再版發行

定價九拾圓

著者

伊藤 藤雄

發行者

東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出 孝雄

印刷者

東京都新宿區市谷加賀町一ノ二二
長久保 慶一

發行所

株式會社 河出 書房
東京都千代田區神田小川町三ノ八

振替口座東京一〇八〇二

河 出 文 庫

5A

小 説 の 方 法

伊 藤 整 著



序 文

著者は本書の第一版（一九四八年十二月）に簡単な「あとがき」を書き、第三版（一九五〇年十月）を出す時にもう少し詳しい解説的な「あとがき」を書いた。今度第五版を文庫本として出すことになったが、文庫本になると、これまでよりも、もつと廣い範圍の讀者に讀まれることになるであらうから、前に書いた二つの「あとがき」の内容に、もう少し著者自身の思ひ出のやうなものを書き加へて、序文とすることにした。

序

本書は「小説の方法」と題したが、それは、人生におけるどういふ力の現はれとして、どういふ必然性があつて、かつまたどういふ仕組みで小説が生まれるか、といふほどの意味である。だからそれは、小説が何故、どういふ風に人生の重要問題と關係があるかといふ事でもある。かつ小説作者といふものは小説の中で何をどういふ方法で書きたがつてゐるのか、といふ事にもなる。讀者の方から言へば、小説を讀んで面白いと思つたり感動したりするのは、一體どんな意味において、どういふ考へ方や書き方のためであるか、といふ事でもある。そのために著者は、小説ばかりでなく、詩や敘事詩や劇作のこと、日本やヨーロッパの社會の構造やその歴史、それから特に文學者の生活のあり方について觸れねばならなかつた。

ある程度小説や詩や戯曲を讀んだ人たちは、色々な疑問にぶつかるものである。自分はこの作

品を讀んで何故感動したのかといふ疑ひ、道德的な話や美しい話と怖ろしい汚い話と、どれが本當の小説なのかといふ疑ひ、小説は人生の赤裸々な眞實を知るためにあるのか、それとも生きる道を學ぶためにあるのかといふ疑ひ、人物の多く現はれる込み入つた話と作者らしい人の孤獨な生活の自傳らしいものと、どつちが本當の小説かといふ疑ひ、等である。

正直の所、それ等がそのまま、二十年も小説を書いて來た本書の著者が、長いこと氣にかけてゐた疑問であつた。かういふ問題は一般の文學論では解決済みといふことになつてゐる問題であるが、著者はそれ等のものに満足できない所があつて、自分流に何とか解決したいと考へたのである。

それ等のことをする上に著者が特に氣を使つたのは、自分が讀んで感服した作品には、何か重要なことが書かれてゐるか、或ひは重要な考へ方や表現の仕方があるに違ひない。それをただ感服してゐないで、その一つ一つが何故、どんな風な仕組みで出來て居り、書いた人の生活や讀んだ自分の生活とどう關係してゐるかを、理論的に考へようとした事である。そして色々な作家の色々な作品の持つてゐる力を較べ、似た所や違ふ所を類別して見た。一番大きな類別は日本とヨーロッパである。しかしヨーロッパのものが、國によつて時代によつて違ひ、日本のものでも、あるものはヨーロッパに近いものがある。さういふ違ひを生む根本になるものとして、社會事情、氣候風土、傳統などが考へられるが、特に目立つのは作者の育ち方と生活の環境であることが分つて來る。

また作品の質や形が、時代により國によつて一定の類型ができるのは、氣質や習慣もあるけれども、さういふ形や質がその社會に住む人に訴へる力があることを、作家たちは、理窟でなく本能によつて理解するからである。だから國や時代が違つても似たやうな社會狀態の中では、本質的に似たやうな傾向の作品が生まれる。しかし環境の物質的條件が總てを決定するといふ結論には著者は達しなかつた。従つて物質的政治的な環境を描くことが最後の文學の道だといふ結論にもならなかつた。また善や理想を描くことが最上の文學だといふ考へにもならなかつた。弱い不完全なものである人間が生きてゐるその生命の味を文字を通して傳へるのが文藝作品であり、色で傳へるのが繪であり、音で傳へるのが音樂である。普通の人が自ら毎日を過ごしながら、はつきりと捕へることのできないで過ごしてゐる自分たちの時代の自分の生命の味、その實質、それを純粹にして味はせるものが藝術であり、その一種として文藝作品、小説がある。そのためには小説には小説特有の特殊な方法があり、それは作者たちの氣質と育ちと生活と時代とに深く關係がある、といふのが大體の結論である。そして生命の存在の仕方としての社會狀態や倫理の秩序と、その生命の認識としての感動や、その表現方としての美の秩序等の間にある色々な關係を考へることが本書の内容をなしてゐる。

著者が特に力を入れて書かうとしたのは、近代の日本の小説の特色のことである。またそれをヨーロッパの文學に較べると、どういふ時代の、どの傾向の文學に似てゐるかといふことである。また人間の生命といふものは、不安定な社會秩序と常に戦ひそれを訂正する働きを續けながら、

歴史の動きといふものを作つて來た。それが近代日本文學ではどう働いたかといふことである。

本書では、色々な作品を例として擧げてゐるから、その全部でなくても、大體のものを讀者は讀んでゐなければならぬ。それは、

ヨーロッパでは、「ギリシャ神話」、「オディッセイ」、「イリアード」、「聖書」、ヴァーギルの「アエネーイス」、ダンテの「神曲」、ボツカチオの「デカメロン」、セルバンテスの「ドン・キホーテ」、シェイクスピアの「キング・リア」と「ハムレット」、ルソオの「懺悔録」、デフォーの「ロビンソン・クルウゾウ」、フィールディングの「トム・ジョーンズ」、フロオベルの「ボヴァリイ夫人」と「聖アントワヌの誘惑」、ラファイエット夫人の「クレヴの奥方」、スタンダールの「赤と黒」、トルストイの「イワン・イリツチの死」と「アンナ・カレーニナ」、ドストエフスキの「永遠の夫」と「罪と罰」、モオパッサンの「水の上」、ポオの「アッシャ家の崩壊」と「ウィリアム・ウィルソン」、ゲーテの「ファウスト」と「ウィルヘルム・マイステル」、ブルウストの「スワン家の方」、ラディゲの「ドルジェル伯の舞踏會」、ジイドの「窄き門」と「法王廳の抜け穴」、トマス・マンの「ブッデンブローク家」、チエーホフの「退屈な話」と「櫻の園」、ゴッリの「死せる魂」、ジョイスの「ユリシイズ」と「若き藝術家の肖像」、マルロオの「人間の條件」等である。

日本では、「源氏物語」、「徒然草」、「枕草子」、「方丈記」、西鶴の「好色一代男」と「好色一代女」と「近世艶隠者」、近松門左衛門の「天の網島」、二葉亭の「浮雲」、蘆花の「思ひ出の記」、露伴の「運命」、藤村の「破戒」と「家」と「新生」、秋聲の「あらくれ」と「假裝人物」、花袋の「蒲

團」、白鳥の「何處へ」、秋江の「黒髪」、泡鳴の「斷橋」、鏡花の「歌行燈」と「高野聖」、漱石の「吾輩は猫である」と「明暗」、鷗外の「妄想」と「澀江抽齋」、荷風の「妾宅」と「澤東綺譚」と「腕くらべ」、宇野浩二の「藏の中」、葛西善藏の「子を連れて」、有島武郎の「或る女」と「カインの末裔」、志賀直哉の「暗夜行路」と「城の崎にて」、芥川龍之介の「鼻」と「河童」、武者小路實篤の「或る男」、佐藤春夫の「美しい町」、横光利一の「機械」と「上海」、川端康成の「雪國」と「禽獸」等である。日本の作家では、それぞれの作家のものを好みによつて、もつと多く讀む方が望ましい。

一九五一年五月

著 者

目次

序文

一	小説への疑問……………	三
二	理論と實作との距離……………	二九
三	内なる聲と假装……………	四一
四	環境と創作……………	五
五	日本の場合……………	七〇
六	放棄と調和……………	八〇
七	自我の作用……………	九一

八	物語りの發想……………	一二
九	散文藝術の性格……………	一三
一〇	スタイルの發生……………	一六
二	西洋の方法……………	一七
三	日本の方法……………	一九
三	附隨的な推定群……………	二〇
	解説（平野 謙）……………	二九

小説の方法

一 小説への疑問（序論として）

第二次世界戦後一年目の頃、私は日本の私小説と作者の身の上話との混雑のことを、ある新聞の文藝時評に書いた。その後二度ほど出席した座談会で、その問題が再提出され、結局その度に結論のない論議のきつかけとなつた。そしてそれ等の座談会で逢つた人には、たとへば舟橋聖一、林房雄、丹羽文雄、木々高太郎、江戸川亂歩といふやうな、多かれ少かれ、所謂私小説反對論者があつた。そして、その論及された文藝時評で、私小説の弱點を取り立てて論じた私が、言はば私小説辯護者の立場に立たされるといふ形になつたのである。

第一議論を立てる場合に困るのは、論難される場合の私小説と、辯護され、または主張される場合の私小説はちがつてゐるやうであるし、私小説そのものが、今の日本の文壇では、たとへば、川端康成、堀辰雄型、それから尾崎一雄、石塚友二、上林曉型、それから、北原武夫、太宰治、高見順型まで、また宮本百合子、徳永直、中野重治型までの間に大變隔りがあるし、また現在かなり大きく變化しつつある、といふことに觸れずに漠然と取り上げてゐるといふ大ざつばさが、特に考へられねばならないだらう。

これを論議する側においても、「私小説は本格の小説と違ふ」といふ立場で論難する林房雄、丹羽文雄、舟橋聖一的態度が一群あり、またある種の私小説の中の「封建的あるひは資本主義社會

の個人意識的執着の悪い獨善さ」を有害であると見る岩上順一、小田切秀雄的な批評態度が漠然と區別される一群をなしてゐる。

以上の區分は、かなり粗雑なものであるが、かういふ風な略圖の設定にしても、岩上順一が試みた以外には、特にはつきりと爲されたこともないやうである。また文學作品の中から、今の小説にある西歐の寫實主義的要素と自我意識究明の要素、それから體質的にまた傳統的に我々日本人の持つてゐる隨筆文學の系統、それから純粹な論理となり得ないで形象を借りてはじめて表現される日本流の思想發表の方法、また現實逃避と諦觀の文人的脫俗生活の好みなどを取り上げて見ることも面白いであらう。

しかし、私は現在の日本の小説を論ずるのに「私小説と本格小説」といふやうな形式で論ずることは、大して意味あることではない、と思つてゐる。それはほとんど、かへつて日本のジャーナリズムが作家に課する作品發表方法として論ずる方がはつきりする。そして新聞の發行部數と大衆雜誌の發行部數、それから評論雜誌や文藝専門雜誌の發行部數と讀者の質の問題として取りあげた方がはつきりするのである。しかしさういふ根源をつつかずに、作品の中に作者の身の上話が多いといふ結果のみを取り上げるのは、日本的な習慣であるから、それに特に反抗しない限り、私小説といふ言葉から現代小説論をうち立てるといふ便宜もあるのである。ただこの「私小説」といふ言葉の意味の混雜をうまく避けることが出來さへすればであるが。

私が前記の時評で、私小説の積極面として取り上げたのは、その中の思想表白の手段としての

私小説の形式のことであつた。繰りかへしになるけれども、一部分を引用するならば、

「たとへば正宗白鳥の『交友録』を讀むとする。するとその作品の中の岩本といふのが岩野泡鳴であり、K博士が河上肇であるといふことをすぐ推定し、さういふ人物の性格と経歴を知り、かつ白鳥その人の思想傾向や経歴を知つてゐる人でなければ、到底この作品を味ふことはできない。(中略) さういふ支へや準備は讀者の方で負擔しなければならぬのである。これが小説であらうか。これ等の作品は文學史的感想と呼ばれるのが至當ではあるまいか。(中略) そこには自惚れと氣樂さと無責任と共に、尊敬すべき謙遜、遠慮といふ徳性さへ發揮されてゐる。驚くべきことである。日本の現代小説を無邪氣な讀者に理解させるために、某々氏は實に多忙な流行作家であつて、執筆多忙のため作中人物は名前のみあつて描寫の何もないことがあるけれども、特に説明なき限り、作中の主人公は作者自らなりと了解されたし、といふ斷り書きを、編輯者が見出しの下に書き忘れてゐるのは實に残念なことだ。(中略) しかし念のために言つておくが、かういふ遠近法の完全な缺除のために日本の現代小説が悉く下らないかといふと、さうでもないから困るのだ。白鳥の『交友録』の思想などは、まことに面白いのだ。日本の小説家に思想がないとはよく言はれて來た言葉だが、私の考はむしろ反對である。(ある種の)日本の小説には思想しかない、と言つた方がはるかに適切である。」

つまり正宗白鳥の作品などは、日本文學の系列としては「方丈記」や「徒然草」などの系列におけば、うまく坐るのではないか、と私は思ふのである。そして、それで大變結構であるし、現

代日本人にとつて名譽なことでもある。私が上記の引用文では省略した、一般的氣易さを非難したやうな苛々した言ひ方で、この種の作風をさまで論じ難ずることはないのである。また批評家はおほむね、思想を主として取りあげ、その思想の肉づけの経過といふ藝術の實質を見のがすから、批評家が白鳥の思想の確かさを買ひ、その肉づけの貧弱さを見のがすことが、より高級な態度であるといふ態度を取ることに目くらまされてはならない。

作家といふものはその時代のその藝術の鑑賞される方向に傾き、かつ批評家の暗示にかかりやすいものである。日本の現在の小説が身の上告白に急で、作品の肉づけに貧弱であるといふ傾向は、批評家の罪でもある。ほとんど常に、批評家は、作家の身の上告白の眞實さと思想のみを厳しく検査するから、作家の方でも、いつの間にか、その二つの點でのみ正確で潔癖であらうとする。また一面では、現代日本の小説の身の上話的貧困さは、社會の作家蔑視の影響である。日本の小説讀者は作家に絶えず眞實をのみ求めながら、なぜ家の子供はよその子供のやうに快活でもなく、調和性もなく、肥つて元氣にならないのかと疑ふ母親に似てゐる。そして瘡せ細つて、眼ばかり光らせた、いぢめられた子供は死んでしまふ。または利口にも、考へぬふりをして、最小限の行動によつてのみ答へようとする擬態が採用される。所謂身の上話作家の素朴單純な構へは、おほむねこの究明逃避の擬態である。

そして、さういふ環境の諸條件の結果、遊ぶ道具は貧弱であり、遊ぶ場所は狭つ苦しいのである。考へる力のある子供であつても、絶えず究明し訊問し鞭うたうとするヒステリックな母親に